

序

空間論とは論治の前提「弁証」の一つだ。

それにしても「弁証」とは何だろう。この医学としての「病」分析であり、それに基づいて治療を導き出す前提であることまでは理解できる。だが、「病」分析に幾つかの物差しがあるのは何故か、中医学をやり始めた頃いつも疑問に思っていた。「病」によって使い分けている。

幾つかの物差しは畢竟、生命の「気の歪」をさまざまなベクトルから解析するための道具である。これら様々なベクトルの綱領となるのが八綱であり、そのために八綱はすべての病に活用される。それは「病」についての概括が必要だからだ。「病」の浅深を「表裏」とし、「病」の性質を「寒熱」とし、「病」の趨勢を「虚实」とし、これらを総括して陰陽を定める。

ところが、外感病と内傷病では既に異なった物差しの使用となる。例えば、外感病での傷寒病は「六経」が、温病では「衛気營血」と「三焦」の各弁証が用いられ、内傷病では「臟腑」と「気血津液」の弁証が主に使用される。

つまり、「病」によって分析の方法を自在に変換させているのだ。たとえば話をすれば、漁師が捕らえんとする魚の大きさ、性質によって網の種類を変えろということだ。小さい雑魚の場合、大きな網の目では無理だし、大きなブリには網の目の粗いしっかりした丈夫な糸を用いる。異なる「病」対象に基づき物差しを使い分けるということは優れた「弁証法」的思考法と言える。それ故に未だ知られなかった新しい難病対策にも大いにこれが発揮され優れた治療方法を編み出す。

近年、われわれは「潰瘍性大腸炎」「クローン病」「非結核性抗酸菌症」「各種悪性腫瘍」「脳腫瘍」「間質性肺炎」等々にかなりの治療効果を得ている。これも素晴らしい「弁証法」的病解析のおかげだと思っている。

さて、「空間論」はこのような「弁証」の一つだ。それは従来からの「弁証」とは全く異なり、生体を前後・左右・上下からなる空間物体と捉え、

その中の「気の歪」は如何にあるかを分析するのである。詳しくは本文を読まれると理解できるが、このような思考過程で面白い発見がある。それはいわゆる「五十肩」である。中医学でも「肩痹」と病名をつけ痹病と位置づけている。がしかし、「空間論」による解析からは「後ろの下」左右いずれかに気の偏在があり、これを治すと治癒することが多い。五十歳前後に生じる病ゆえ「五十肩」と呼称されるのであろう。つまり、加齢による腰の変調、「腎虚」に基づく病であることが判明した。

2008年4月30日

鍼狂人 蓮風